

---

**咆哮の轟く星空の夜に。**

確認のためいっておきますが僕どらえもんじゃないです。

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

咆哮の轟く星空の夜に。

### 【Zマーク】

290195

### 【作者名】

確認のためこいつをおきますが僕ぢりともんじやないです。

### 【あらすじ】

龍童沙紀は小さじころからおかしな夢をよく見る。しかし、それが最近になると、より、リアリティが増し、見る頻度も高くなつていた。

夢の中で沙紀は巨大な白銀と青の混じった龍になる。そして楓という名の法師を背に乗せ、禍々しい化物と空中戦を繰り広げる。星空の夜、楓の「ああ、行こうか。」という優しい声かけにより、五百はあるであろう闇の軍勢に向かい翼を躍らせる。楓と共に戦え

る喜びを噛み締めながら、咆哮を上げ、青白い巨大な炎を吐き出し、楓との連携で闇を燃やし尽くす。どちらが現実かわからないほど、鮮明な夢。祖父にそのことを相談してみると、龍童家の祖先は龍と人間のハーフだと聞かされる。覚醒した龍の血。楓は過去に精神を強制転移させられ、歴史の闇へと身を投じるのであった。

悠久の輝き（前書き）

プロローグです

## 悠久の輝き

雲一つない澄み渡った星空の荒野に一組の龍と法師がいた。

地面は荒れ果て、地獄そのものな大地とは対照的に、空の闇は透き通った水晶のようにひどく美しく、月と星の光は傷だらけの彼らを絵画のように映し出した。

「ふう、終わったようね。無事に帰れたかしら。」

（サキエル、サキエルなのかい？よかつた、言えないかと思ったよ。あのなサキエル、俺はお前の背中に乗れて幸せだ。こんなに誇れることば、他に何一つない。今までありがとうございました。）

照れくさそうに楓は言った。愛おしい白銀蒼の龍の頬を、さつきまで痛みで動かなかつた腕で、いや全身で温めながら。

「ずっと見てたわよ、あなたたちの勇姿。それにそれは私のセリフよ。私の背中を安心して預けられるのは楓だけ。あなたは最高のパートナーよ……愛してるわ。」

楓の鼓膜を揺らす龍の声は、とても優しく、ゆっくりとしていて、包まれるよつに穏やかだった。

（さあ、行こうか。）

そつ楓が意思を送ると、龍は小さく喉を鳴らし、楓を背に乗せ、星空に吸い込まれるよつに登つてこつた。彼らの顔はとても穏やかで、透明であつた。

混ざり会つた光は雲を抜けて天に登り、その後大地にひとつ生命が産み落とされたのだった。

龍童沙紀は、小ちこじらからおかしな夢を見る。

楓といつ法師の格好をした男を背に乗せ、なにやら化物と戦う夢である。

最近見る夢の鮮明さは、どちらが現実かの区別がつかないほどのだった。

今夢から覚めたのか、それとも今からが夢なのか。

そんなことを考えてる間にも、朝は容赦なくやつてきて、母親の逆鱗に触れるのだった。

景気良く開け放たれ、壁に打ち付けられるドア、毎度毎度壊れないで偉いなあ。

「こつまで寝てるの…！　学校に遅刻するわよ、速く準備して朝食たべなれこ。」

「はーー。」

どちらが現実なんてどうでもいい、龍の時は龍の時で頑張って戦わないこと、死んじゅうし、今は今で準備しないと、お母さんに怒られて死んじゅうし。私にとってはどうじも現実だ。

はは、まだ寝ぼけてるや、どう考へてもじゅうが現実。学校めんどうだなー。

そんなくだらないことを永遠考へながら、制服に着替え、寝癖を直

す。夢は夢だとほつきり気付くころで、リビングに向かい、少し冷えたがまだ暖かい朝食に手を伸ばす。

おばあちゃんは私が生まれる前に死んでしまつたらしい。  
うちは娘の私と両親、それとおじいちゃんの4人家族だ。

一  
沙紀、ひづる

うそ、お前が。あいつらが。お前がやつらだよ。」

ああ、今田も沙紀はかわいいね。

「うう、おじこさん、たゞ、わざわざ、ほんにかり、

毎朝沙紀におじしゃんに褒められる。その「たけでなく心から」つているとわかる態度に、沙紀は小さな楽しみを感じていた。

「 いただきます。」

「ほい、じいを畠ひ上かってくださいな。」

## もくもくと食事をする父親と祖父

私はトーストと田玉焼きを好んで食べる。毎朝人ごとに違うメニューを作ってくれる母には、まったく、頭が上がらない。

ふと、沙紀は龍になつた感覚を思い出した。虚空を駆け巡り、翼を

広げ、大きく咆哮する。背中にはいつも乗っている法師の存在。沙紀は導かれるように口を開いた。

「セツニエバ、最近不思議な夢を見るんだ。」

「ほひ、どんな夢だい？」

白米と干物を食べながらおじいちゃんが聞いてきた。父も耳は傾けてこるようだつた。

「あのね、私がおつきな龍になつてゐる。それで、鼻筋のととのつたかつこい黒髪の法師を背中にのせて、妖怪とか化物とか鬼とか、とにかくそういう悪そうなやつと戦う夢。

でも不思議と怖くないんだ、背中に乗つてゐる法師の人が、なんだかすうじく心強くして。なんじく心強くして。

「なんでだらうね。」

そういつて笑う沙紀を、今まで見たことのない神妙な顔つきで、箸を止め、祖父は見つめた。

「その夢はこつから？」

父が聞いた。食事の間は基本寡黙を守る父から質問を貰えるとは思わなかつたので、少し間が空いてから答えた。

「あ、えつと、じこ1週間ぐらい？ すんごい鮮明なんだ。」

まるで映画の中に入ったみたいで、風の匂いも、空を飛んでる時の空氣の抵抗も感じる。不思議だよ、ほんと。」

母は、またこの子は面白い」といつちやつて、といいたげな顔で苦笑いをしていたが、父と祖父は違つた。

短い沈黙がながれる。そして互いに顔を見合わせ、うなずいた。

祖父は張り詰めた空気を裂くよつに、口を開いた。

「沙紀、いまから言つ」とをよく聞きなさい。」

見たことのない真剣な祖父の表情に、生唾を飲み込み、うなずいた。

「我が龍童家は、代々龍の血をひいているといわれている。祖先の始まりが、龍と人間の混血なんだ。

というのも、大昔の人が、天に登る龍のような光の塊をみつけてね。おかしいと思いその場所にいつたら、赤子がいたそうだ。それを育ててくれたらしい。

その後、人間と龍のハーフといわれた神童は、人間と恋をし、子を宿した。龍の血は人間の交わるたびに薄れていき、いまでは、ほぼ無いといつても過言ではない。

私も息子も、もちろんその影響をほとんど感じたことがない。多少人より力が強くて、頭がいいくらいだ。沙紀もそうだろう。私も今までそこまで本気で信じてはいなかつた。

一応口伝なので、伝えてはいたが・・・まさか現実とは。」

たしかに沙紀は華奢な見た目と反して、高校生なのに成人男性より力があるし、勉強も授業中以外したことがないが、つねに学年トップで、地域でも一番偏差値の良い高校にかよつていた。

しかし、ただそれだけのことだ。

私が龍と人間の子の末裔？

にわかには信じられなかつた。

「おじいちゃん、なに言つてるんですか。それに、たとえそうだと  
しても、沙紀が生きていくには関係のないことでしょ。変なこと言  
わないで下さいよ。」

少しあわてて母が口を開いた。こんな話を聞いたことがなかつたらし  
い。

「それがあるだよ、美紀さん。

私たち親子には龍の記憶が一切ない。夢に出る」とも、もちろんな  
い。

しかし、沙紀にはあるよつだ。なんらかの要因で龍の血が覚醒した  
のだろう。

その夢の中の状態というのは、祖先の記憶かもしれん。

しかし、あまりにリンクしすぎている。もしその夢の中で龍の沙紀  
が戦死するようなことがあれば……」

両親は息をのんだ。私は祖父の発言を鵜呑みにするとはできなか  
つた。

現実より現実味のある夢。

しかし、私が龍になつてゐるのには間違いないのだが、体を動かし、  
発言しているのは、私ではなく祖先の龍自身だ。

正確にいふと、龍の感覚を共有している、という方がいいかもしだ

ない。

この龍の意志が祖先の意志から私の意志に切り替わったときに、戦死したら、現実の私も死ぬ。。。ありえない話ではない。

「おじこちゃん、ビバーナーハー。」

沙紀が困惑の悲しみを叫ぶ瞬間、体は青白い光に包まれ、その場に倒れこんだ。

薄れていく意識の中、私の名前を叫ぶ家族の声が、頭の中をこじだました。

沙紀が意識をとり戻した時には、すでに龍になっていた。

## 変わらない思い

巨大な森の端にある、洞窟の前。狩りにいった楓は、自分用の鳥と、パートナー用の猪を担いで、腹をすかして帰りをまつているであろうサキエルのもとに駆け寄った。

「サキエル、今田の『飯は』ちそりだよ。夜は激しい戦闘になるだらつかね。おいしいもの食べて力をつけよう!」

楓は、まだ距離があつた比較的大きな声で話しかけた。しかし、意志表示はかえってこない。

風化した石像のようピクリともしない。

「サキエル? おーい、どうした? 具合でも悪いのかな?」

覗き込むように話しかける。

すると龍は、ハツと息をのみ、喉を鳴らした。

「ん・・・・・ あ、あなたは楓さん! ですよね。 てことは私・・・精神!」といつちの世界に来ちゃつたつてこと? どうしよう!」

突然意味のわからないことを言い出したパートナーに困惑を隠せない楓。感情は表情に表れていた。

「何をいつてるんだい? はは、サキエル、さては寝ぼけてるなあ。」

樹齢1000年の大木ほどの大きさのある翼をゆさぶり、焦りながら龍、いや沙紀は答えた。

「違うんです! あ、あの実は私はサキエルさんじゃないんです。

「めんなさい、突然言つても信じてもらえないかもしれませんが、今私は楓さんとサキエルさんの未来の孫の孫の孫の孫の孫の孫の孫の孫の曾孫の玄孫ぐらいの孫の精神なんです！」

体はサキエルさんですが・・・

見たことのないぐらいあたふたしたサキエルに、楓は不覚にも可愛いい、と思つてしまつた。

普段冷静で、神殿のような神聖な雰囲気をもつ知的な存在。それが今ではまるで子供だ。

「ど、なるとや、今サキエルの体を支配しているのは、僕とサキエルの未来の子供の子孫つてこと？」

信じられないなあ。

君は龍になつたことを疑問に思つてないようだし。

それになんで僕が楓つていう名前だとわかるの？

大体僕とサキエルは種族が違うから、子を成すことはできないのだけど・・・た、たしかに僕たちは愛し合つてゐるけどね。」

楓は頬を紅くそめていた。

「実は何度も戦闘中、私の意志はサキエルさんに支配されながらも、確かにこの世界にいたのです。だから名前もわかつて・・・それに祖先が龍だつたという話を祖父から聞きました。」

少し落ち着いた口調で沙紀は説明した。うなずく法師。

「まあその話が本当だとして、君は未来に帰れるのかい？サキエルはもとに戻れるのかなあ。

といふか、明らかに性格も喋り方も違つし、きっと本当なんだろうけどね。うんうん、信じるよ。」

そういうて楓は困ったように微笑んだ。思ったよりあつさり状況を飲み込んでくれたことに、楓とサキエルの信頼関係の強さに感謝した。

「信じていただけるんですか？ ありがとうございます！ あ、でも、帰りたいんですけど、帰り方がわからなくて・・・体の動かし方とかなら一緒に体感して慣れてるんで問題ないんですけど。」

「そうか、それは困ったね・・・そういうえばサキエルの精神はどうにいっちゃんたのかな。」

「多分サキエルさんの精神と意志はまだ私の中にいます。直接声は聞こえてきませんが、存在を感じじむことができるの、間違いないです、はい。」

「なるほど、まあサキエルが無事なら僕はなんでもいいや。でも困ったなあ、今日の夜に、闇の住人との最終決着をつけるつもりだったのに・・・いや、君を責めてるわけではないよ、不可抗力だったわけだし。

でもどうしよう、一人で戦つてくるか。」

ぐるぐると同じところを歩きながら楓は呟く。しかしその眼光は鋭く、どこか遠くをとらえていた。

「わ、私多分戦えますよ！ 戦闘ならサキエルさんの体で何度も体験してるし、体の動かし方もわかります。」

「しかし、体験といつても、意志を添えていただけなんだろう？ それにこの時代と無関係の君を巻き込むわけにはいかないよ。」

「一応私も龍の血を継いでいて、かなり濃いほうらしいので、身体能力も高かったですし、足手まといにはならないと思います。それに、多分楓さんが死んでしまうと、未来の私や家族もいなかつたことになつてしまつと思ひます・・・」

私のためにも是非協力させてください。」

その言葉には、強い意志を感じられた。サキエルに似た闘志を感じとつた楓は、その申し出をありがたく受け取ることにした。

一通り状況説明が終わつたあと、沙紀の腹が音をあげた。法師がサキエルのためにもつてきたのであるつ食事をおもつていたので、せっかくなのでいただくことにした。グロテスクな見た目をしていたわりには塩味がきいていて、まろやかな口どけだった。

「うううそつをまでした、楓さん。おいしかつたです。」

「うん、本当は人間だからお口に合うか不安だつたけど、今の味覚は龍だもんね、良かつた良かつた。」

漫画肉に噛り付きながら楓は答えた。あぐらをかけて肉にかぶりつく姿は男らしくもあり、子供らしくもあつた。沙紀は楓の性格が少しわかつた気がした。

「えーと・・・」

指をこじらせて向かながら、貧乏ゆすりをしている。沙紀は直感で、まだ名前を告げていないことを思い出した。

「そうだ！自己紹介がまだでしたね。あの、私、沙紀っていいます。17歳です。」

「沙紀か、いい名前だ。たしかに、少し似ているね、いやそっくりだ。17歳とはこれまた若い・・・僕は 風鈴院 楓。22歳のおじさんだよ。見た目の通り、法師をやっている。サキエルとともに今は闇狩りをしてるから、最近はあまり人間の供養とかはしてやれてないけどね。」

海に沈む夕日を見る瞳で、楓は自分の左手を眺めた。その瞳には悲しみだけでなく、誓いを思わせる意志があった。

「ナツコ、どうやってサキエルさんと出合ったんですか？」

「はは、やっぱり気になるよね。じゃあ、行動開始まで時間もあるし、すこし昔話でもしようか。」

不敵な笑みをうかべながら、楓は嬉嬉と過去を語りだしたのだった。

それは、楓が6歳の誕生日を迎えた日のことであった。風鈴院家では6歳から厳しい修行がはじまる。食事などの作法はもちろん、法師としての仕事も、父親の楓<sup>ハヤテ</sup>に付き添い、一人前になるための修行をおこなわなければならなかつた。

滝行、座禅、体術、呼吸法、絶食、さまざまな修行が、幼い楓を蝕んだ。

中でも一番辛かつたのが法術の修行だ。

法術など、でないからだ。他の修行は決められたメニューをこなせば終わつた。

しかし、法術の修行は、無から有を生む、もつとも神に近い行為。父は精神と肉体を極限までひとつにし、その術が存在することを強くイメージ出来たときに、法術は発生するといった。

「いいか、楓。法術つてのはそう簡単にできる技ではない。焦らず、しかし確實に修行を積むのだ。

他の修行もすべて法術に繋がつていて。心の鍛錬を怠らないように。」

厳しくも、春の日差しを思わず暖かい父の右手が、楓の頭をなでた。

「はい、父様。」

父にはすべてを見透かされてる。そつ思つことが時々ある。楓が虚無に襲われたときや、脱力感に苛まれたとき、かならず父は優しくアドバイスをくれた。

その的確なタイミングと、厳しくも子煩惱な両親のおかげで、楓はなんとか辛い修行に耐えることができた。

尊敬する父と同じ職につきたい、といつも、また楓を強く支えた。

「はは、まあ百聞は一見にしかず、だ。今から父さんが出す法術をよくみていいなさい。」

そういうて、右手を前方に伸ばし、左手を右腕の肘に添えた。森のざわめきが沈静化し始め、小鳥のさえずりが急に静まり返った。まるで、時をとめたようだ。

父の集中力は、肌で感じ取れるほどだった。

「牙碎炎法撃！！」

空気が完全に凍つた。そう思った瞬間、父が言靈を発した。時は烈火のごとく動き出し、すさまじい熱気を感じた。

前方にある大木を、巨大な炎の牙が喰らいついた。

視界が赤く炎で埋め尽くされたことに気付いた時、すでに目の前の大木は、灰に変わっていた。

緊張の糸をといた父はいつもと同じように、楓に説いた。

「いいか楓、法術というのは、自分の肉体的なエネルギーを消費して無から有を生む技ではない。

脳内で再生したイメージを、現実に呼び起こす技だ。

今父さんは、炎での大木が包まれ、灰になる想像を強く、した。

肉体と精神が一致し、言靈によりその力を増幅させて、法術を行つたんだ。わかるな。」

「はい、父様。」

「つまり、他の修行の成果が、この法術を左右するつてことだ。  
一人前になるために頑張りなさい。

着実に修行を積めば、いつか必ず法術は発動する、大丈夫、楓は私の息子だ。」

父が法術に長けた法師だということは聞いていたし、寺に妖怪が襲撃してきた時に、爺様と一緒に戦闘するところは遠目でみていた。しかし、極至近距離でみたソレは、楓の心を強く揺さぶつた。畏怖さえ覚えるその威力、果たして使いこなせるだろうか。

その日から楓は、さらに修行に熱が入るようになった。

楓<sup>ハヤテ</sup>には持病があつたからだ。父が死んだあと、母様を守り、寺を継ぐのは私だ。

はやく一人前にならなくては、と。

しかし、楓の願いとは反して、一向に法術は発生しなかつた。肉体と精神を一致させ、法力によつて身体能力を著しく向上させる技は身に付いた。しかし、放出系の法術は、どうあがいても身に付かなかつた。

父とともに出かける妖怪退治も、魑魅魍魎どもを殴りとばす程度。妖怪や鬼、化物や影は、この世のものでは滅することはできない。放出系の法術、もしくは極限まで高められた体術（やはり、そこには法力を身に纏う必要があるのだが）を取得するしかなかつた。

時は流れ、楓は15歳。父の持病はさらに悪化し、戦闘などは爺様が変わって行つていた。

「失礼します。」

すでに起き上がりになくなつた父の部屋は、森林の香りがして、楓の気持ちを落ち着かす。

精神修行の座禅も、この部屋でよく行つていた。

広い正方形の空間の中心に、布団を敷いて父は寝ていた。しかし、その法力は健在で、父が寺にいるだけで、妖怪共は敷居を踏むことすらできない。

楓の精神と肉体は、厳しい修行によりかなりのものになつていた。下級妖怪程度なら、ひとひねりにできる。

だが、やはり法術を使用することはできなかつた。

しかし、中級妖怪以上になると訳が違う。

肉体による直接攻撃では限界があつた。なぜ、私には法術の才がここまでないのだろう。何が足りない。何をしたらよいんだ。

楓の焦りは限界に達していた。

「楓。」

震える声で、楓の鼓膜を振動させる。

「はい、父様。」

「すさまじい修行をしているな。見事な肉体と精神状態だ。私が15の時には、そのような力、もつていなかつたよ。」

唇を噛み締め、楓は言った。

「しかしそう……しかし私は法術を使役できません。これでは、父の跡目になるどころか、母様を守ることすら。お年の爺様を働かせてしまつような私など……」

「取り乱すでない。すべての法は冷静沈着な心から生まれる。精神の修行を積んだ楓なら、わかっていることだろう。それに、爺様の件は、楓の責任ではない。本来ならまだ私が働くべき時期だ。すまない思いをさせている。」

「父様……。声を荒げてしまい、申し訳ありませんでした。失礼します。」

私は馬鹿だ。大馬鹿だ。父様の前で情けない姿を見せた上、恥までかかせてしまつた。  
どうしたらよいのだ。

修行内容をさらに厳しくしたが、人間としての格が上がるばかりで、法師としては見習いにもなれなかつた。

楓、16歳夏、父、颯が逝去した。

楓が誰よりも努力していることをわかっている母様や爺様は、責めることなどしなかつた。

罵つてほしかつた。

お前のせいだ、と。代々続くこの寺も、もうおしまいだ、と。

優しさが、ただ、怖かった。

死のう。この世に俺は必要ない。これ以上生きても自分の無力に苦しむだけだ。

亡者より亡者らしく、魂の抜けた楓は食糧も水も持たず、フランラと樹海の闇へ、足を運んだ。

もう楓はなにも考えていなかつた。自分が今、歩いているのか、止まつているのかもわからない。

ただ、死に向かつて進んでいる実感だけが、楓の足を無意識に進めた。

歩き続けて5日目。厳しい修行や絶食の成果で、楓は一向に痩せ衰えなかつた。

常任なら飲まず食わず寝ずで歩き続ければ、間違いなく死んでいるだろつ。

生きたいと願わなくとも、鋼となつた楓の肉体と精神は、死ぬことさえ許されなかつた。

太陽が沈み登る。これの10回目を見届けたとき、楓はある巨大な洞窟にいた。

まるで鍾乳洞のような祠を見つけた時、楓はここを私の墓にしようと思つた。

リーン、リーンと空気の鳴る音甲高いがする。青田へ輝く突起した岩の数々。

太陽の光が届かないはずなのに、その発光する岩のおかげで、辺りを見渡すことができた。

その美しさに感動はしたが、生への執着はおこらなかつた。

神がくれた最後の贈り物。

ありがたく頂こう。

しばらく、といつても2日以上だが歩き続け、楓は最深部についた。

より一層広いその空間に寝そべり、楓は死を待つことにした。さすがの楓も17日間寝ずに進み続け、死を予感していた。

両親や爺様のこと思い出す。しかし、生きようとは思わなかつた。

父様、ふがいない私をお許しください。最後に懺悔し、そして思考をやめた。

「あら、こんなところに客人とは。珍しいこともあつたものね。それにここは人間ごときには立ち入れない聖域のはずなのに。」

楓は目を疑った。そして思った、ついに幻覚と幻聴か、と。  
なんせ目の前には、この世のものとは思えないほど美しい、龍の姿  
があつたからだ。

一切傷のない、ダイヤの輝きをもつ青い龍鱗、すべての生物を凌駕  
する圧倒的な質力と威厳。  
均整のとれたフォルム。

しなやかで透き通るような巨大な翼。そして水晶を超越するすべて  
を見通すおおきな瞳。  
存在自体が芸術だった。

「あ、あなたは一体……」

起き上がる力のない楓は、倒れたまま声を振り絞り話しかけた。

「それはこいつのセリフよ。ここは私の聖域。勝手に侵しといて、  
いい御身分だ」と。  
なぜあなたはここに?」

「わからない……死のつと思いつ、歩き続け、気付いたらここ  
ました。  
勝手に入ってしまい申し訳ない。」

「死、ね。人間とはやはり愚か。自ら生を絶つことを望むなんて。  
信じられないわ。

生物は今日を生き抜くために必死だといつのこと。  
中途半端に食物連鎖の上位にたつと、勘違いしちゃうのかしい。」

あまりに神々しいその姿をみたとき、楓は思った。  
まだ死にたくない、と。

絶望の塊になり、もぬけのからとなつた楓の体を、熱い血液が巡り始めた。

「私は・・・私は生きたい！」

朽ち果てた楓の体を淡い光が包み込む。枯れ果てた皮膚は水々しさをとりもどし、青い顔色は健康的な赤に染まつた。水や食料などの補給は必要だが、何より生への執着が楓を突き動かした。

「なるほど、法師だったのね。どうりで。それも、かなりの腕の若いのに立派ね。」

「あなたのおかげだ！ 私は今まで法術を使えなかつた。それが突然回復法術を使えるようになつた。

私の生への執着が、肉体と精神を一致させ、言靈により発動したのだろう。

何度感謝してもたりない。

私の名前は風鈴院 楓。もし名があるならお聞かせ願いたい。」

頭を地面にこすりつけ、涙を流しながら感謝した。その光景を龍は理解できずに見つめていた。

「私は何もしてないわ。あなたが勝手に」

楓は龍の言葉を遮つた。

「それでも、だ！ あなたの美しく、神々しい姿に私は感動した。絶望しかなかつた私に、あなたは光をくれた。

このまま死んでいれば、私は罪人として一生地獄で身を焼かれてしまう。

この命、あなたのために使うことを約束する。」

「普通の人間より少し上等だからといって、私になにか貢献できると思つたら大間違いよ。

あなたに出来ることは何もないわ。」

下等に人間風情になにができる。宝石より美しい龍は人間を見下した。

「ならばより修行する。私にも法術が使えることがわかったのだ。どんな修行にも耐えてみせる。あなたのために使える命になるよう、私はこの魂を燃やそう。

それが私の生きる理由だ。ありがとう、ありがとう。」

その日から、楓はたびたび龍のもとへ訪れるようになった。爺様も寺で余生をすごし、母は結界内で安心して暮らす。

楓はみるみるうちに立派な法師となつていった。

始めは龍に煙たがられていた楓も、様々な献上物や、紳士な態度に、次第に心を許すようになった。

若くして父を超えた法力を得たが、楓は修行を怠らなかつた。命の恩人である龍に少しでも恩返しをしたいからである。

また、龍にした約束を守りたかった。なにができるかはわからないが、何か出来ることが生まれたときに、力になれないのは嫌だつたからである。

楓は18歳の時、すでに日本で最強の法師といわれるようになった。海を割り、大地を碎く。底知れぬ精神力と体力。どんな強大な妖怪でも、楓にすれば赤子同然だつた。

しかし、そんな危険因子を、闇の住人が許すはずがなかつた。

妖怪というのは、人間の思念や情が結晶化し生み出される、人間の産物。

だが、闇の住人は違う。

闇の住人とは、おもに鬼のことである。鬼は、人類が存在する大昔から君臨し、今でも人間よりはるか上位の存在として、恐れられている。

鬼も鬼で、虫ケラ同然の人間にいちいち干渉することはなかつた。たまに食糧や水を奪われたりする程度だ。鬼の領域には、人間は決して干渉しない。

また、妖怪の中にも鬼と等しい力を手にするものもいた。

九尾狐や、牛鬼などである。

人間と仲良くしていいる本来高等種である龍も許されなかつた。普段は鬼や妖怪が攻め入つたときのみ迎撃していたが、サキエルも楓に意識がいっていた。また、私のせいで鬼に狙われてしまつたという罪悪感もあり、二人は協力して、闇に抗うことを選んだ。

## 決戦の上空へ

「と、まあこんなところだよ。」

楓は申し訳なさそうに言つた。

「そうだつたんですか・・・これから鬼達との決戦だといふのに、なんかすいません。」

「なあに、君のせいじゃないさ。それじゃ、ボチボチいきますか。大丈夫、さつきは不安がらせるようなことをいつたけども、僕はこう見えても強い。守つてみせるよ。」

そよ風が髪を揺らし、爽やかな微笑みを彩つた。一切の不安を払拭させめるその表情に、心臓が高揚した。

「はい、お、お願ひします！」

巨大な首を下げ、礼をした。と同時に、楓は沙紀の首にまたがり、両の手を添えた。

「今から法力を注ぐ。すこしひっくりするかもしれないが、安心してくれ。」

「はいー。」

楓は呼吸をとめ、両の手に神経を集中させた。黄色の光が楓の体からあふれ出し、やがて肩を伝い手のひらに向かつた。

「んっ・・・・・

「痛いか？」

「いえ、大丈夫です。」

「よかつた。では・・・・はあーーー。」

掛け声とともに勢いを増した光は龍の全身を包みこんだ。黄色だつた光は龍の体に混ざり、やがて藍色に変化し、発光した。

「これで多少の攻撃ははじき返すはずだよ。でかいのが来たら僕が直接防御の術を発動する。沙紀ちゃんは指示通りに動いて、攻撃してくれ。」

「ありがとうございます。わかりました。」

「では、ござ出陣とござひじやないかーーー。」

「今夜は風が気持ち良いなあ。星も綺麗だ、雲ひとつない。」

「ほんとですね。」これから命をかけて戦うとは思えません・・・

「本当にいいのかい? やっぱり引き返したほうがいいんじゃないかな。いくら僕が強いといつても、確実に怪我をさせないでいられる保障はないからね。」

「いえ、たぶんもとの世界に戻るには、この戦いが鍵になっているんだと思います。何度も夢で経験しているシーンだと思いますし。」

「なるほどね。わかつた。僕もなるべく防御に徹するよ。おっと、やつ」せんのお見えだ。ふふふ。ああ、いじつか。」

「はいー。」

洞窟から飛び出し、星を楽しむ余裕はほとんどなく、闇の大群にいきついた。音速に近い速度で飛行可能なこの体だからこそできる技だ。地響きのような咆哮を轟かせ、密集しすぎて単体では見分けのつかない鬼達を威嚇した。熱い何かが首の辺りに溜まつてくる。大きく口を開け、息を吐いたと同時に、巨大な火の玉が鬼を包みこむ。密集した黒の塊は黒い炎を吐き出し、攻撃してきた。

「沙紀ちゃん、いい調子だよ。このペースで頼む! さつき君にかけた法術なら、群れている下級鬼の鬼火ぐらい焼き消せるはずだ。安心して焼き尽くしてくれ。」

「はい！」

巨大な翼から巻き起こす疾風が鬼の体を切り裂く。鋭い爪で引き裂く。絶え間なく続く火炎放射によって、空中を覆っていた下級鬼は瞬く間に蹴散らされた。

「沙紀ちゃんほんとに学生だったの？すゞすきだよ。でも無理しないでね。」

「何度も夢で経験してましたから・・・サキエルさんの動きが体に染み付いてます。」

「なるほどね、こりやあ僕の心配は必要なかつたかな。とつとどボスのほうもかたづけてしまおう。」

「はい！」

二人が安心したのも束の間、大群の中核から、より一層巨大でおぞましい鬼が5体現れた。

「おつと、こいつは気が抜けないのが来たな・・・さつきのようにな鬼の攻撃を一切無視して攻撃してたら身がもたない。僕の指示に耳を傾けてくれ。心に直接かたりかけることもある。信用してくれ。」

「わ、わかりました。」

中級鬼は巨大な鬼火を吐き出してきた。あれにあたつたらまずい。戦闘経験がない沙紀も、生物の勘で気づかれた。

「沙紀ちゃん、右上空に回避、同時に火炎の準備！」

巨体を振りかざし熱を喉にためる。しかし、鬼の一体が棍棒を回避で大きく振り上げ、待機していた。しまった、やられる。そのとき、楓の意思が届いた。

（口を鬼に向けて！僕を信じて。）

「大地よ、我の声を聞き、我に従え。折り重なる鉄壁で我を守れ。」

龍の顔面に振り下ろされた棍棒は、楓の作り出した鉄の壁にさえぎられた。鉄をたたく鈍い音が聞こえたとき、強く圧縮された熱の塊が、鬼を包みこんだ。その後ろにいた鬼2体を巻き込み、灰に変えた。

（まだ鬼の攻撃は続いている、前方に加速！）

楓の意思が伝わり、瞬時に翼を羽ばたかせた。刹那まで沙紀がいた場所には残りの2体が総攻撃していた。一瞬でも行動があぐれていたら、肉塊にされてしまう。

「右手に祈りを、左手に誓いを。送る花束は200、我が声を聞きたまえ風の精霊シルフィ、その力をもってすべてを切り裂け！」

龍大きく翻り、鬼に向け両手を向けた。掌から200の風の刃が現れ、鬼を細切れにした。

「よし！大丈夫かい、沙紀ちゃん。」

「はい、危ないとこりでした。」

「はは、とつさに行動に移せると信じていたよ。」

「心臓は4つくらいに増えてる気分ですが・・・」

「そいつあ高鳴りすぎだ、怖かったね。すまない。」

「いえ、お役に立ててうれしいです、がんばりますー。」

不安や緊張、恐怖がないといったら嘘になる。しかし、それ以上に安心と期待にこたえたいという気持ちがあつただけだ。無傷でここまでこられたのも、楓の援護あつてのこと。信頼をおくこはお互に十分だった。

しかし、焼きぬくした煙や、引き裂いた肉が闇の核に集まりはじめ  
る。

時空がかすかに歪み、いやな空気がたちこめた。空気が薄まり、息  
苦しい。暗闇の中から姿を現した鬼は、すさまじい霸氣を放つてい  
た。

「楓さん・・・」

震える声で安心をもとめた。声が聞きたい、ただそれだけ。  
「氣を引き締めていい。やつが鬼の王、いわゆる上級鬼だ。」

鬼はゆっくりとした口調で、低い声を響かせる。

「貴様、我らと同じ高等種に位置する龍だといふのに、人間など虫  
ケラと手を組みおつて。恥を感じないよつだな。いいだろ？、消し  
潰してやる。ハツ！――！」

圧縮された空気の玉が、何十にも張り巡らされた守りの光を碎き、  
龍の体に直撃した。

「くつ、はやいな。沙紀ちゃん、大丈夫？」

「ちょっと痛いけど大丈夫です、指示を！」

「上に！接近戦はまずい、遠距離から攻撃していい。」

大きく上空に身を躍らせる。電撃が鬼の角から発生し、襲い掛かつ  
た。

楓は大きく腕を電撃に向け、直撃寸前のところで、法力によつて打  
ち消す。

(もつと離れて。詠唱する時間を稼がしてくれ。)

「ち、人間」ときに我が雷を消されるとは。龍の力ありきだとして  
も、少しなめていたようだな。」

鬼は体を丸く縮めた。大きく反動をつけて大の字になると同時に、  
圧縮された闇の塊が、楓たちに直進してきた。

(あれはくらうとまざい、下方に飛んで。)

時空を歪ませながら迫る衝撃波を、間一髪のといひで避ける。

「甘いわ！」

鬼の叫びとともに、衝撃波は碎け散り、方向をかえて散弾のよう  
に沙紀達を襲つた。

「きやあああああああああああ！」

痛みという痛みが体中を駆け巡る、しかし鬪志の炎は喉に溜まつて  
いた。

さきほどから詠唱を続けていた楓が力強く両手を鬼にむけた。

「破壊の神シヴァよ！ 我が精神と血を今捧げん。その力を具現し、  
闇を打ち消せ！」

楓の体中を紫色の光を覆い、激しく膨張した。やがて光は手の先に  
集まり、音速を超えて放たれた。

「ふんつ。」

しかし、鬼の気による防御壁が何十にも重なり、搔き消されてしまふ。

(→ 扱た！…！)

長い時間チヤーリジされた太陽に近い火球は鬼を捕らえた。

しかし、焼かれた身のまま、鬼は接近してきた。風をまとい、こぶしが沙紀の右翼みぎよくを貫く。今まで感じたことのない痛みが沙紀を襲つた。さらに闇の塊を足にやどし、蹴り上げてきた。楓は龍の体をとびだし、防御壁をだしてうけとめた。しかし、直撃は避けられても衝撃は楓を襲い、腕と肋骨が砕けた。

沙紀は痛む体を無理やり叩き起こし  
翼を失い、うまく飛べない。

大地に身を打つた。地べたに這い蹲り、痛みに嘆いた。鬼も身を焼かれながら落下し、

沙紀はあまりの痛みに気絶し、動かなくなってしまった。楓は龍に触れたかつたが、肋骨がくだけていたため動けなかつた。

「治療の神よ、彼女に千の恵みを。」

かされる喉を引き絞り、龍に回復法術をかける。しかし、沙紀は目を覚まさない。絶望が楓を襲つた。

しかし、すぐに殺氣に気付き振り向いた。ゆっくりと鬼が立ち上がり、こちらにむかってくる。

楓は度重なる技の連続で、力をぼば失っていた。精靈や神を使役する大技を短時間で連発したのも大きい。最後の一撃をうつべく悲鳴を上げるからだを鞭打ち、詠唱する。

「大地よ、我が声を聞き、我に従え。鋭利なる棘をもつて、闇を貫け。」

鬼の体を大地から飛び出す岩石の槍が突き刺した。しかし、鬼はフラフラとこちらに向かってくる。もはや奴に意識はなかつた。ただただ、殺意によって体がつき動かされているようだつた。

目の前にきた鬼はにやりと口角を上げ腕を振り上げた。

サキエルと沙紀ちゃんだけは守らねば・・・。体をもつて鬼の体をうけようとする。

（楓さん、伏せて！）

大きく口を開き龍は炎を吐き出した。楓は伏せるというより、倒れこむように地面に抱きついた。

地獄の業火が鬼を包みこむ。やがて灰になり、塵となつて風に運ばれた。

龍は再び目を閉じたのだった。

（沙紀ちゃん！沙紀ちゃん！）

楓は地面に伏しながら意思を送り続けた。しかし返事はない。楓の魔法により、砕け散った翼は再生しているが、全身に負った戦いの傷跡までは治せなかつた。

僕は、世界で一番大切な人を失つてしまつた。絶望という絶望が楓の心を蝕んだ。

今までのことが走馬灯する。闇に眼をつけられてからの鬼と共に戦う日々。

信頼と恋愛感情の狭間で悶々として、大切にしていることは伝えられても、世界で一番必要としていて、愛していることを伝えられなかつた悔しさ。精神だけだが、自分たちの争いには直接関係ない沙紀ちゃんを死なせてしまつた自分への怒り。感情が逆流し、頭を叩き潰してくる。

大粒の涙を流し、またいつかのように大地に伏せ、死を待つた。俺もはやくサキエルのところにいかせてくれ。この苦惱から開放してくれ。

しかし、死を望んでしまつてゐる時点で、サキエルには会えないことに気付く。

俺はあの日から何にも成長していなかつたのか。サキエルがいないと、こんなにも無能で、未熟で、子供なのか。

あらゆる葛藤が楓を突き刺す。すべてを神に懺悔し、無の心に戻した。しかし、あふれ出す涙はとまらなかつた。

絶え間なく涙を流してゐたとき、龍の体から発光する少女が抜け出していた。

ありがとうございました。そう口を動かしているように見えた。

沙紀ちゃんが現世に戻れたのか。悲しみの涙が喜びの涙にかわった。  
直後、龍はサキエルとして眼を覚ます。

二人の魂は溶け合い、愛を誓うのだった。

## 誕生（後書き）

一話のシーンに戻ると最後の詳細がわかります。

## 再開～ヒローグ～

突然倒れこんだ沙紀を布団に寝かせ、家族は囲むように祈り続けていた。

しかし、再会はあっけなく訪れた。

「んつ・・・あ、ここは・・・」

「沙紀、沙紀なのかい？　ああ、よかつた、一時はどうなるかと。」  
安堵の空氣に家族は包まれた。思いのほか心配してないようみえて、沙紀は少し驚いた。

「大事な娘が突然氣絶したのに、以外とみんな反応薄いね・・・」

「まあ、まだ5分しかたってないからな。」

いそいそと仕事に向かう準備をしながら父が言った。

「5分？　それだけ？うわー、私命がけで楓さんと一緒に鬼と戦つてたんだよ。」

「よくやつた、よくやつたぞ沙紀い！！！」

「うわ、おじいちゃん泣きすぎ。5分なのに。」

「さ、学校にいきなさい。」

「はーい。」

沙紀は通学路を走った。さつきまでの「ことが嘘のようだ。

あのまがまがしい鬼は、現代にもいるのだろうか。いや、一番えらそうなの私たちが倒したし、大丈夫だよね。考え方をしながら角をまがつたとき、勢いよく人と接触事故をおこした。

「痛つたたたたた。ごめんなさい。」

「すいません、あの、大丈夫ですか？」

そよ風が少年の髪を揺らし、爽やかな微笑みを彩った。

## 再開～ヒーローグ～（後書き）

最後に出会った少年は言つまでもなく楓の今世での姿です。沙紀はサキエルの今世での姿です。

サキエルと楓によつて産み落とされた子供のずっと先の孫としてサキエルが転生し、楓もどこかで転生し再びあつたわけですね。運命のいたずらつてやつです。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9019s/>

---

咆哮の轟く星空の夜に。

2011年8月30日16時30分発行